

Q 病院で感染性の病気と診断されました。どうすればよいですか？

A 感染性の病気と診断された場合は、出席停止となり登校することはできません。

(欠席扱いにはなりません。) 病気が治ったら、医師の許可を得てから登校してください。

- 治癒証明を前もって提出する必要はありません。登校する時に児童に持たせてください。
- 学校で決められた「治癒証明書」の書式はありません。各医療機関のもので大丈夫です。
- 治癒証明書は有料となることがあります。
- 後から、感染症であることが分かっても、欠席をさかのぼって出席停止にすることができません。

※出席停止対象となる感染症については、以下の資料を参考にしてください。



参考資料 **学校で予防すべき感染症** (学校保健安全法19条)

第1類：発生はまれだが重大な感染症

感染症名	出席停止期間
エボラ出血熱、クリミア・コンゴ出血熱、痘そう、南米出血熱、ペスト、マールブルグ病、ラッサ熱、急性灰白髄炎、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群(SARSコロナウイルス性のもの)、鳥インフルエンザ(H5N1型)、新型インフルエンザ	発症から、治癒するまで。(入院治療が必要)

第2類：放置すれば学校で流行が広がってしまう可能性がある飛沫感染する学齢期の主要な感染症

病名	おもな症状	感染経路	潜伏期	感染期間	出席停止期間	備考
インフルエンザ	高熱(39~40℃) 関節や筋肉の痛み 全身倦怠感 咳、鼻水 のどの痛み	気道 接触 飛沫	1~4日	発熱後 3~4日	発症から5日を経過し、かつ、解熱した後2日を経過するまで	肺炎や脳炎などの合併症に注意 発熱や意識の様子に気をつける
百日咳	コンコンという短く激しい咳が続く	飛沫 気道	5~21日	1~4週間	特有の咳が出なくなるまで または、5日間の適正な抗菌薬治療が終了するまで	乳幼児は肺炎の合併に注意
麻疹 (はしか)	発熱、鼻汁 目やに 発疹、くしゃみ	飛沫 気道 接触	7~18日	発疹の出る前 5日 ~ 出た後3, 4日	熱が下がって 3日を経過するまで	

流行性 耳下腺炎 (おたふくかぜ)	発熱 耳の前下部の腫れと 痛み(押すと痛む)	飛沫	2~3週	耳下腺の腫れる 前7日 ~ 腫れた後9日間	耳下腺、顎下 腺または舌下 腺の腫脹が始 まった後5日を 経過し、かつ全 身症状が良好 となるまで	思春期以後の感 染では、睾丸 炎、卵巣炎の合 併に注意。
風疹 (三日ばしか)	38℃前後の発熱 発疹 リンパ節の腫れ	飛沫 気道	2~3週	発疹の出る前7日 ~ 出た後7日間	発疹の全てが 消失するまで	妊娠初期の感染 は奇形児出産率 が高い。
水痘 (水ぼうそう)	発疹 → 水泡 →かさぶた 軽い発熱	飛沫 気道 接触	10~21日	発疹が出る前 1日 ~ 全ての発疹がかさ ぶたになるまで	全ての発疹が かさぶたになる まで	
咽頭結膜熱 (プール熱)	38~40℃の発熱 のどの痛み 目やに 結膜の充血	気道 接触 (結膜)	2~14日	発病してから 2~4週間	主な症状がなく なった後2日を 経過するまで	医師の許可があ るまで、プール 不可
結核	(初期の症状として) 発熱、咳、疲労感 食欲不振 など	飛沫 経口 接触	感染しても 臨床症状出 現は一様で はない	一様ではない	病状により医師 が感染のおそ れがないと認 めるまで	感染が強く疑わ れれば発病予防 のために、化学 療法剤の服薬を 行う
髄膜炎菌性 髄膜炎	高熱、痙攣、頭痛、 嘔吐、点状出血斑 など	飛沫	3~4日			適切な抗菌薬治 療をできるだけ 早期に開始する 必要がある

第3類：飛沫感染が主体ではないが、放置すれば学校で流行が広がってしまう可能性がある感染症

病名	おもな症状	感染経路	潜伏期	感染期間	出席停止期間	備考
腸管出血性 大腸菌感染症 (O-157)	激しい腹痛 水様性の下痢 血便	経口	10時間 ~8日		発症から、医師 により伝染のお それがないと 認められるまで	溶血性尿毒症 症候群などの合 併症に注意
流行性 角結膜炎	目の異物感、充血 まぶたの腫れ 目やに 瞳孔に点状の濁り	接触	2~14日	発症の3日前 ~治癒まで (約2週間)		医師の許可があ るまで、プール 不可
急性出血性 結膜炎 (アポロ病)	目の激しい痛み 結膜が赤くなる 異物感、涙が出る	接触	1~3日	発病してから 5~7日間		

コレラ					発症から、医師により伝染のおそれがないと認められるまで	海外から帰国後の下痢に注意
細菌性赤痢						
腸チフス						
パラチフス						
※ マイコプラズマ肺炎	頑固な咳 発熱・痰 のどの痛み	飛沫	2～3週間	呼吸器症状の強い間	急性期が終わり全身状態が回復するまで	
※ 感染性胃腸炎 (ノロ・ロタウイルス等)	嘔吐 下痢 発熱 腹痛	経口	1～2日	患者の糞便からは回復後3～7日まで	下痢・嘔吐症状が消失し全身状態が回復するまで	汚染された食べ物・患者の嘔吐物に注意
※ ヘルパンギーナ	高熱 咽頭の水疱	飛沫 経口	2～7日	急性期 便からは2～4週	咽頭・口腔の水疱が改善し、発熱がなく全身症状が改善するまで	
※ 手足口病	軽い発熱(2～3日) 小さな水疱が口の中、手足にできる	飛沫 経口 接触	3～5日	のどから 1～2週間 便から 3～4週間		
※ ウイルス性肝炎	ウイルスの型により異なる				医師により伝染のおそれがないと認められるまで	キャリアは出席停止とはならない
※ 溶連菌感染症	発熱 咳 のどの痛み 倦怠感 頭痛 食欲不振 腹痛	飛沫	2～4日	高熱の期間	適切な抗生剤治療がなされ24時間を経て全身症状が回復するまで	急性腎炎・リウマチ熱等の合併症に注意
※ 伝染性紅斑 (リンゴ病)	両ほおに少し盛り上がったじんましん様の発疹 発熱	飛沫	7～14日	(症状出現後は感染力が弱い)	全身症状が良い者は登校可	妊婦は感染しないよう、流行期には注意が必要
※ 伝染性膿痂疹 (とびひ)	顔や手に米粒～豆大の水疱→破れて膿が出るかゆみ	接触 (水ほうの分泌物)	2～5日	水疱から膿の出る間	登校可 (直接接触しないよう病巣を覆うこと)	医師の許可があるまでプール不可

※印の感染症:3類の中でも「その他の感染症」とされ、条件によっては出席停止の措置が必要と考えられるもの。